

資料名 | ヒンドゥー神像
 標本番号 | H0133567
 地域 | インド
 サイズ | 縦 92cm × 横 38cm

想像界の生物相
半人半獣のヴィシュヌ化身像

民博 グローバル現象研究部 み お みのる 三尾 稔



ヒンドゥー教の神々のなかでも、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三体はもともと権能の強い主神として信仰を集めている。ヒンドゥー教には神や魔物、人、その他生きとし生けるものが存在する世そのものが何度も再生と破壊を繰り返すという世界観がある。そのひとつひとつの世に悪がはびこり、世界の存続に危機が迫ると、ヴィシュヌ神は自らの化身を世に送り込んで悪を滅ぼし世直しをする。化身の数には神話体系によってさまざまな違いがあるが、今日いちばん広く信じられている神話では未来の（つまり今あるこの世をいずれば破壊し、再生させる）化身も含めて十の化身があるとされる。

◆◆無敵の力◆◆
 十化身のうち、最初の四つが動物と人の姿の合体形として世界にあらわれ悪と戦った。すなわち、マツヤ（魚と人の合体形）、クルマ（亀と人）、ヴァラーハ（猪と人）、そしてナラシンハ（獅子と人）である。このうち、ナラシンハは魔王ヒ

ラニヤカシプとの戦いの物語が人口に膾炙し、人獣合体形の化身のなかでは最も人気が高い。

ヒラニヤカシプは、兄のヒラニヤークシャがヴァラーハに成敗されたことを恨み、復讐を誓って長い苦行の日々を過ごす。ブラフマー神はその苦行を嘉し、ヒラニヤカシプの望みをかなえ、「どんな神にも魔物にも、人にも獣にも殺されることなく、また昼でも夜でも、いかなる建物のなかでも外でも、空中でも地面の上でも、どんな武器によっても殺されることはない」という力を授ける。

無敵の体となったことを確信したヒラニヤカシプは抗う人びとや神々を打ち倒し、遂に傲慢にも彼の世すべてを支配しようとする。まさにそのとき、ヴィシュヌ神はナラシンハ、つまり人でも神でも獣でもあるものとして姿をあらわし、昼と夜の境目である黄昏どきに、建物のなかと外の境目となるヒラニヤカシプの宮殿の入口で、空中でも地面でもない自らの膝の上で、武器を使わず素手で切り裂いてヒラニヤカシプを殺してしまう。

◆◆境目にあるものの力◆◆
 右ページの木像はヒラニヤカシプがナラシンハの膝の上で絶命する瞬間をとらえている。この構図はナラシンハを描いたものとして、絵画や彫像などでよく見かけるものである。

ヒラニヤカシプは世界のすべての事物や時空間を分類し、そのどれにも負けない存在になることによって世界を支配しようとした。しかし、どんな分類や区別にも、それになじむことのない境目や曖昧なものがつきまとう。ヴィシュヌ神はその境界に宿り、慢心する魔王をあざ笑うかのように彼を討伐したのである。

ナラシンハの物語が人心をつかみ、その像が繰り返し返し作られるのは、事象を事細かに区別し分析しさえすれば世界がわかり、支配できるという思い上がりへの戒めが込められているからではなからうか。浅はかな人知のおよばない境目の部分にこそ聖なる力が宿る。境界パワー恐るべし！である。